

イーリアスにおける神々

—人間界を映す鏡—

脇本由佳

1 1巻と24巻の神々

ホメーロスの時代の宗教観は、その作品を見ただけではうかがい知れぬもののように思えるが¹⁾、宗教性はともかくとして、イーリアスの神々は、様々な文学的機能を持っていると思われる。本稿では、そうしたイーリアスにおける神々の文学的機能について考察を行なう。

先ずイーリアス1巻と24巻は、構成の上で、逆の順序で対応していることは、屢指摘されている²⁾。そのうち、神に関する部分は、次のような構成になっている。

- 1巻 アポローン、疫病をもたらす
アテーネー、アキレウスを制止
テティス、アキレウスと対話
テティス、ゼウスと対話
神々の集まり（ゼウス・ヘーレーの対立）
- 24巻 神々の集まり（アポローン・ヘーレーの対立）
テティス、ゼウスと対話
テティス、アキレウスと対話
イーリス、プリアモスに命令
ヘルメース、プリアモスを助ける

このうち、人間に働きかける神は、1巻ではアポローン、アテーネー、テティス、24巻ではテティス、イーリス、ヘルメースである。

しかし、1巻と24巻の神々の介入の仕方には、大きな違いがある。1巻の神々の介入は全て、それぞれの神が個人の動機によって行なっているわけであるが、それに対し、24巻での介入は、全てゼウスの命によって行なわれている、ということである³⁾。これは24巻の場合、初めに神々の集まりが来ているから当

然とも言えるが、しかし例えば8巻の構成などを見てみると、最初にゼウスがἀγούρηνを催して意向表明を行なっているにも拘らず屢他の神々が勝手に介入を行おうとしている。

1巻と24巻の場合、この、ゼウスの意志を伴う介入かそうでない介入か、という違いによって、物語そのものの方向づけがなされているのである。1巻は、恐るべき争いと、大いなる動乱の物語の始まりであり⁴⁾、巻全体が激動に満ちているが、24巻は、人間の間での同情と和解の場面であり、秩序が復し、人間の悲哀が静かに満ちわたっている巻である。そして、これらの状況を映すように、1巻の神々の介入は、個人的で混乱しており、24巻の神々の介入は、ゼウスの秩序の下にある。このように、人間界のありようと神界のありようが相俟って、1巻と24巻を、動から静へ、争いと動乱の始まりから秩序、というよりは、終焉の静けさへ、という枠組みを形作っている。1巻の人間界の争いに対応して、神々のありようも混乱しており、24巻の人間同志の和解に対応して、神界にも秩序が成り立っている。

神々は人間に働きかける力であるが、しかし同時に人間界を映し出す鏡のような役割を果たしているとも言える。1巻と24巻の神々も、人間界の出来事を惹き起こす為の動機づけを行なってもいるが、人間界の出来事を反映しているとも言える。そして、イーリアスは飽く迄も、人間中心の文学である。ホメーロスの神々は人間をモデルにして作られている⁵⁾。神々は、どちらかと言えば、人間を映し、際立たせるものとして解することができるのではないだろうか。

イーリアスの詩人は、人間の同じような行為を描くにも、神の介入によるものとして描く時と、神の介入無しで描く時とがある。例えば、7巻の初めでは、アポローンとアテーナーが一時休戦の協定を結び、それによってヘレノスがヘクトールに一騎打ちを勧めて、人間界にも一時休戦が成るのであるが、6巻でヘレノスがヘクトールに提案をする際には、神からの動機づけは無い。神の登場の機能を考える場合、筋の必然ということや、物語の動機づけというものもあるが、そのほかにも考えねばならないことがある。1巻と24巻の神々は、1つの枠組みを作り、それによって、動から静へという、物語の方向づけを行なう、という機能をも持っているのである。

さて、以上見て来て解ることは、先ず、神界のありようは、鏡が像を映すように、人間界のありようと対応しているということ。その対応の仕方、或いは神界のありようは、物語の方向性を明らかにする、という機能を持つこと。それを見る際、神々の人間への介入が、ゼウスの意志によるものかそうでないものかという違いが、重要であること。そしてこの、ゼウスの意志によらない介入とゼウスの意志による介入とが、1巻と24巻の場合、1つの枠組みを構成して、イーリアスの物語全体を囲んでいる、ということである。

だがこうしたことは、1巻と24巻においてのみ言い得ることなのであろうか。ここまでの観察によって解った事柄を踏まえて、イーリアスの他の箇所を見てみよう。

2 枠構造

13巻から15巻にかけては、ゼウスの $\beta\omicron\upsilon\lambda\acute{\eta}$ ⁸⁾ に対するポセイダーオンとヘーレーの反抗、という一連の物語が続いている。ゼウスは13巻の冒頭でトロイア人とヘクトールをギリシャ軍の船陣に近づけると、戦場から目を転じて、遠くの地を見下ろす。一方ポセイダーオンはギリシャ人を憐れみ、ゼウスに対して憤りを覚える(13.15-16)。そしてカルカースに化けて、アルゴス人を奮い立たせ、両アイアースに呼びかける(13.43ff.)。これは明らかにゼウスの意志に反する介入であり、物語の新しい展開がここから始まっている。以下、13巻全体を通じて、ポセイダーオンはギリシャ軍を支援し続ける(60:両アイアースを気力で満たす、83:ギリシャ人を励ます、206-209:孫の死に腹を立て、ギリシャ軍を励ます、215ff.:トアースに化けてイードメネウスを励ます、554-555, 562-563:アンティロコスを守る、677-678:ギリシャ軍を支援する)。とりわけ、ポセイダーオンはギリシャ軍への支援を、「堂々と($\alpha\mu\phi\alpha\delta\acute{\iota}\eta\nu$; 356)」行うことは避け、「密かに($\lambda\acute{\alpha}\theta\rho\eta$; 352と357. いずれも行頭)」行なったと述べられており、この介入がゼウスの意志には反することが強調されている。

13巻が終わり、14巻に入っても、同じ物語が続く。相変わらずポセイダーオンはギリシャ軍を支援する(135ff.:アガ멤ノーンの右手をとって励

ます、151-152:ギリシャ人に力を注ぎ込む、362ff,:ギリシャ軍を励まし、指示する、384:ギリシャ軍を先導する、509-510:「闘いを覆した」)。が、そこへ更に、ヘーレーが助勢する。ゼウスがヘーレーに欺かれた後、ヒュプノスがポセイダーオーンのもとへ使いに立ち、一層ギリシャ軍を支援するように勧めるのである(14.153-362)。ここにポセイダーオーンは、ゼウスの意志に反する介入を堂々と続行できることになる。

ところが15巻に入ると、目覚めたゼウスがヘーレーに、イーリスとアポローンを呼ぶよう命じ(15.53ff.)、ヘーレーがその命に従って(15.143ff.)ゼウスのβούληに対する一連の反抗の物語が終わりを告げる。この後ゼウスはイーリスとアポローンを使いとして出す(15.157ff.)。

さて、ここでのイーリスの使命は、ポセイダーオーンの介入をやめさせることなので、人間への直接介入ではないが、24巻におけるのと同じ様に、ゼウスから神々が使いに出されているわけで、24巻における介入と同じ働きを持っていると考えられる。更にアポローンがゼウスのもとから使いに出され(15.220ff.)、ヘクトールを起たせる。アポローンはトロイア軍の先頭に立ち、ギリシャ軍と戦う(15.307ff.)。ここでのアポローンはアイギスを持っているので(308)、この介入がゼウスの命に拠っていることが強調されている。

以上のような、13巻から15巻初めにかけての流れを見て判るのは、13巻での神の介入は専らポセイダーオーンの(ゼウスの意志に反した)ものであること。14巻ではヘーレーが、ゼウスを欺く形で(当然、ゼウスの意に反して)人間界への介入に等しい事を行ない、ポセイダーオーンが実際の介入を行なう、という同じ方向に動いていること。15巻では、人間への介入(又はそれに等しいこと)を行なっている神はイーリスとアポローンであり、どちらもゼウスの意に拠っていること。

つまり、13・14巻ではポセイダーオーンとヘーレーという二神によって、ゼウスの意志に反する介入が行なわれており、15巻ではイーリスとアポローンによってゼウスの命令に基づく介入が行なわれている。一方、1巻では、ゼウスの意志を伴わない神々の介入が行なわれており、24巻では、ゼウスの命令に基づく介入が行なわれている。13・14巻対15巻の関係と、1巻対24巻

の関係、という図式は、互いに似通っている。殊に、15巻ではゼウスが13・14巻の事件の終結をもたらし、24巻ではゼウスが1巻以下の事件の終結をもたらしている、という点でも、両者の図式は全く一致している。いずれにおいても、ゼウスの意志によらない介入とゼウスの意志による介入とが、枠組みを作って一連の物語を縁取っていることになる。

更にほかにも、この枠構造を強めている事柄がある。

先ず、13巻115、すなわちこの一連の反抗の物語の始まりの場面において、ポセイダーオンがギリシャ人達に向かってこういうせりふを述べている：

「…立派な者の心というものは、折れるものなのだ（…ἀκροταί-
τοιοι φρένες ἐσθλῶν.）」（アガ멤ノーンを恨んではい
けない、との趣旨⁷⁾.）

ところが実は、15巻203で、イーリスがポセイダーオンに対して、よく似た勧告の言葉を述べているのである：

…στρεπταὶ μὲν φρένες ἐσθλῶν.

この2つの似通った表現は、一種のring構成をなしている事が考えられる。

また、13巻216では、ポセイダーオンはトアースというギリシャ方の武将の姿を借りて、ギリシャ軍を励ましているのであるが、15巻285-299では、今度は本物のトアースが登場して、ギリシャ軍の為の提案を行なうのである。すなわち、ポセイダーオンが化けたトアースと、本物のトアース、神の登場と人間の登場が、1つのセットになって、枠構造を強めているのである。

ところで、そもそもイーリアスは、数限りないretardation⁸⁾の連続である。イーリアスの物語の全体そのものが、トロイア陥落の物語に対する一個のretardationである。そしてそのイーリアスの物語の中でも、無数のretardation（従って、いわばイーリアス=retardationに対するretardationということになる）が綿々と連なっている。13巻から15巻にかけての、ゼウスのβούληに対する反抗の物語も、この、イーリアス全体に対する1つのretardationなのである⁹⁾。

13-15巻初めの一連の物語を、ゼウスの意志に反する神々の介入とゼウスの意志による介入とが枠組みを作って囲んでいることを、既に見て来た。そこでつまり、神々の個人的な介入は、retardationを惹き起こし、ゼウスに

よる介入は、それを終わらせているということになる。前者と後者は一連の retardation を、1つの枠組みで囲んでいるわけである。そして、実は1巻対24巻の関係にも、同じ図式が見られるのである。イーリアス全体がトロイア陥落の物語に対する一個の retardation であるから、1巻はまさに retardation の始まりであり、24巻はその終結なのである。

3 人間界の趨勢を示す機能

先に、1巻と24巻を観察して、神々は人間界のありようを映し、これを明らかにする働きを持つ事を述べた。この働きをも、前節で扱った13-15巻を中心に見て考察しておく。

例えば13巻521-525では、全ての神々がゼウスの β ο υ λ η によってオリュムポスに閉じ込められているさまが描かれている。ギリシャ軍を支援しているポセイダーオン以外の全ての神々が閉じ込められている、というこの描写は、トロイア方の劣勢を表すことになる。実際のところ、13.455-520や、13.526-554あたりの戦闘描写そのものは、ほぼ互角なので、神の描写が無ければ方向づけがはっきりしない。

また、14巻では、153-353の ἄ π α τ η 物語でゼウスが眠らされ、ポセイダーオンの支援の下（14.389-391等）、アイアースがヘクトールを倒す（14.402-420）。その後440-507で、典型的な戦闘描写が繰り広げられるが、実はここではギリシャ方とトロイア方の戦士が1人ずつ交互に殺されているのみで、どちら方が優勢なのかを明らかに示すような描写ではない。次に詩人は、14.509-510で、「名高き大地を揺すぶる神が、闘いの趨勢を覆した…」と語る。ここまでの経過を見て来ると、ヘクトールが倒されたことを除けば、実際の戦闘描写では、510までは優劣はついていない。ただ、ゼウスが眠らされたことと、トロイアの唯一の護りであり象徴であるヘクトールが倒されたことにより、ギリシャ軍の優勢が示されているのである（そのヘクトールも、実際にはアイアースに倒されるのであるが、14.389-390の記述は、ヘクトールとポセイダーオンが戦っているかのような印象をも与える）。

15巻307ff.では、アポローンがトロイア軍の先頭に立ち、ギリシャ軍と戦

う。もはやギリシャ軍を支援できる神は居なくなっているのです、丁度14巻で、戦場がポセイダーオンの独壇場になっていたのと逆の図式となって、これ以後トロイア軍が優勢になる事が判る。このように、戦闘描写の中にあっても、神々の描写は、人間界の趨勢や物語の方向を理解する上で、大きく役立つものとなっているのである。

イーリアス中のもっと大きな構成の上で見ると、例えば8巻は、その全体に神々の描写が非常に多く、また位置としては、2-7巻——殆どがアキレウスの $\mu\eta\nu\lambda\iota\varsigma$ とゼウスの $\beta\omicron\upsilon\lambda\eta$ の物語に対するretardationである——の後である。この8巻では、ゼウスの度々の他の神々に対するおどしと、確固とした意向表明により、物語の方向がはっきりする。実際には、戦闘描写そのものは二転三転しているので、これが無ければはっきりしないのである。この巻のゼウスの意向表明は、いよいよギリシャ軍の滅びの方向がはっきり定まって来たことを示している。次の重要な9巻に向けて、ギリシャ軍の敗色をはっきりさせているのである。この8巻に至って、真に $\beta\omicron\upsilon\lambda\eta$ が動き出し、この後は、ほぼ着実に $\mu\eta\nu\lambda\iota\varsigma$ の結果の物語が進んで行く。神々の描写の多い8巻全体が、この転機を示しているのである。

4 神界と人間界の対応

1節において、神界は鏡が像を映すように人間界と対応していることを述べた。このことを別の箇所でも明らかにしておきたい。

11巻は595まで、ほぼ戦闘描写であるが、時折りゼウスや神々が描写される。78ff.で、オリュムポスの神々は、皆ゼウスを咎めていた、と言われる。しかしゼウスは1人離れてイーデーに坐り戦況を見つめている(11.80-82)。そしてゼウスは185ff.で、イーリスにヘクトールへの命令を伝えに行かせる。596で場面転換が行なわれ、ギリシャ軍の船陣の場となる。負傷したマカーオンに気付いたアキレウスが、599-601でこう語られる：

「足速い、高貴なアキレウスは、彼を見てとった。彼は、大きく割った船の端に立っていたのである、険しい労苦と涙に満ちた潰走を見つめて。」

ここに顕著に見られるのは、この巻の前半部(～595)と後半部(596～)

の対応である。ゼウスはイーデーから戦のもようを見下ろしており、アキレウスは船の端から同じく見下ろしている。ゼウスはイーリスを人間のもとに遣わし、それは物語の方向づけという機能を果たしてはいるが、さりとてそれはさ程大きな介入ではない。同様にアキレウスはこの後パトロクロスをネストールの陣に遣わし、それは後々には大きな結果を生むことになるが、現時点ではアキレウス自身はいかなる行動も起こしておらず、またパトロクロスを遣わすこと自体は戦争に対する大きな介入ではない。他の神々はゼウスを咎めており、一方この後ネストールやパトロクロスすらも、アキレウスを非難する。ゼウスは殆ど孤立しており、アキレウスもまた孤立している。すなわち、前半部と後半部の対応は、神界と人間界の対応なのである。

5 神と人間の呼応関係

Whitmanによれば、イーリアスにおけるゼウスは、アキレウスのありようを反映している¹⁰⁾。確かに、前節に見た箇所等において、ゼウスとアキレウスの呼応関係が認められる。しかし、こうした特定の神と人間の呼応関係は、果たして恒常的なものなのであろうか。14巻-18巻の筋をめぐって、このことを検討することにする。

先ず、14巻において、ゼウスが眠っている間に、ポセイダーオーンはますますギリシャ軍を励まして、アキレウスが居ない不利は認めつつも、一層頑張るようにと言う(14.366-368)。アキレウスの不在はギリシャ軍にとって不利益だが、13・14巻のゼウスの不在は逆に利益になっているわけで、逆の機能を果たしていると思われるのである。

一方、ヘクトールがアイアースに倒されることは、ゼウスの眠りと呼応していると思われる。次の15巻では、目覚めたゼウスが、アポローンをヘクトールに遣わし、アポローンがやって来た時のヘクトールの様子が、15.240-242でこう描かれる：

「彼は坐っていてもう寝てはおらず、今しがた息を取り戻したところだった、自分の周りの仲間達も判って、あえぎと汗も止まっていた、アイギスを

持つゼウスの意志が彼を起たせた時から。」

ここでヘクトールが息を吹き返していることは、ゼウスの目覚めに対応していると思われる。一見、ゼウスの眠りと目覚めは、ヘクトールが倒されることと息を吹き返すことの、単なる動機であって、別にゼウスのありようがヘクトールのありように反映しているわけではないようにも思われる。しかし、ゼウスが遣わしたアポローンが到着する前に、ヘクトールは既に回復に向かっているので、やはりゼウスの目覚めがヘクトールに反映していると考えられるであろう。

さてヘクトールに、アポローンは15.244-245でこう言う：

「ヘクトール、プリアモスの息子よ、なぜ他の者達から離れ、力をなくして坐っているのか。」

ὤοσφίρ（離れて）という言葉は、普段ゼウスとアキレウスによく使われている言葉である。ゼウスのβούληがトロイア軍を勝たせることにある間だけ、ヘクトールがゼウスと呼応すると思われるのである。すなわちここに、ゼウスとの呼応関係が、アキレウスからヘクトールへと移行しているのである。

ヘクトールの本格的な戦闘描写が開始される（15.583）と殆ど同時に、ゼウスの意図と今後の計画が明確に説明される（15.593-602）。更に、15.610-612, 636-637, 693-695等の箇所では、ゼウスとヘクトールの密接な関係が感じられ、ゼウスとヘクトールが一体化したかのような観もある。

16巻の初めでは、船陣でパトロクロスが泣いている。そして16.5で、

「彼を見て、足速い、高貴なアキレウスは憐んだ。」

と語られる。

一方15巻12では、目覚めたゼウスが倒れているヘクトールを見て、

「彼を見て、人々と神々の父は憐んだ。」

と言われている。15巻のゼウスと16巻のアキレウスは、丁度対称形のように行動している：ゼウスはヘクトールを憐んでトロイア軍の力を盛り返させ（尤も動機は別にヘクトールへの憐みではないが）、アキレウスはパトロクロスを憐んで彼を派遣し、ギリシャ軍の力を盛り返させるのである。

パトロクロスの出陣に当たって、アキレウスはゼウスに祈る。その祈りに

先立って、231-232でこう描かれる：

「彼は天を見上げて、酒をそそいだ。すると雷を楽しむゼウスも、それに気がついた。」

つまり、アキレウスがゼウスの居る天を見上げ、ゼウスがそのアキレウスを見下ろしているわけで、この描写は、対称形をなしていたアキレウスとゼウスが、丁度向き合っているようなイメージを与え、印象的である。

さて16巻のΠατρόκληςの物語は進行し、ヘクトールはゼウスの意思によって退却する。ヘクトールの逃走について、16.658で、こう説明される：

「彼がゼウスの聖なるばかりを悟ったからである。」

17巻に入り、ヘクトールがアキレウスの武具を着けるのを見て、ゼウスはこう言う：

「ああ哀れな奴め、死のことなど全くお前の心には無い、お前のそば近くに来ている死のことが。お前は随一の勇士の神々しい武具を着ている…」

(17.201-203)

ὦ δειλὸν…（ああ哀れな者よ；201）というのは、パトロクロス討死の場で、ヘクトールがパトロクロスに言った言葉でもある（16.837）。また、ゼウスが人間に向かってσὺと（202）2人称で呼びかけるのは稀であり、目立つ箇所である。ここはゼウスのひとりごとであるが、あたかもそば近くで正面から語りかけているかのような印象を与える。

17.582ff.で、アポローンがヘクトールを励ます為に、非難する。すると17.591-594で、ヘクトールの描写があり、更にゼウスの描写が続く：

「彼を、苦痛の黒々とした雲が覆った。彼はきらめく青銅のよろいかぶとを着けて前線の間を進んだ。まさにこの時クロノスの子は、綫の垂れた、輝くアイギスをとった、そしてイーデーを雲で覆った…」

苦しみの雲に覆われ、輝く青銅の武具で進むヘクトールの姿と、輝くアイギスをとって、イーデーを雲で覆うゼウスが、呼応している。このゼウスの描写は、気象現象を描いているので、simileに似た印象を与え、ヘクトールの姿を描写しているようにも見える。そして、17.595-596で、ゼウスの意志が説明されている。

次の18巻に入ると、思案しているアキレウスの姿が描かれる。アンティロコスがパトロクロスの死を知らせ、それを聞いたアキレウスについて次のように言われる；

「…苦痛の黒々とした雲が彼を覆った。」(18.22)

これは先程の17巻のヘクトールの描写と全く同じであり¹¹⁾、ゼウスとの呼応関係が既に再びアキレウスに戻っていることが考えられる。

アキレウスはイーリスの忠告でトロイア軍に姿を見せに行く。そこヘアテーネーもやって来る。

「…アテーネーが、彼の力強い肩の周りに縋の垂れたアイギスを投げかけた。また彼の頭のまわりを、女神達のうちにも高貴なその方が、黄金の雲で取り巻いた。そしてその雲から、光り輝く炎を燃やした。」(18.203-206)

この描写は、17巻でヘクトールとゼウスが同時に描かれていた際のものによく似ている。そして、雲と光というモチーフの連続によって、ゼウスとの呼応関係があとづけられるのである。

ここまで見て来たように、ゼウスとの呼応関係は、物語の進行につれ、アキレウスからヘクトールへ、ヘクトールから再びアキレウスへと、移行していることが解る。

ゼウスは、ホメーロスをはじめとするギリシア文学で、しばしば「勝利」という概念と同一視される¹²⁾。そのゼウスとの呼応関係が移行することにより、戦いの勝利の行方が予示されていると考えられるのではなかろうか。すなわち、こうした手法によっても、物語の方向が示されているのである。

ところで、2節において、神の個人的介入はretardationを惹き起こし、ゼウスによる介入はそれを終わらせることを証した。では、この節で扱った16巻の場合、どうであろうか。最終場面のアポローンの介入は、一見、個人的介入のようにも見える。しかし実際には、16巻全体に、ゼウスの意志が強く働いているのである。

16巻には、ゼウスの名が現れるsimileが非常に多い。気象現象を描写するsimileで、その中でゼウスが言及される：16.297-300（雲と光），364-365（雷雲），384-392（雨）。このことも、この巻全体に、ゼウスの意志が強く働いていることを暗示しているのではないかと思われる¹³⁾。

パトロクロスの死に際してのアポローンの介入も、ゼウスの意志によっているのである。それ故、16.799で、ゼウスがヘクトールにパトロクロスの（アキレウスの）兜を与えた、と言われるのである。また16.804で、「ゼウスの息子なる、支配者アポローンが、彼（パトロクロス）の胸よろいを解いた。」と、アポローンとゼウスの関係が強調されて描かれるのも、そのためである。ゼウスの意志とアポローンの行動が相俟って、1つのことを行なっているのである。それ故、844以下で、パトロクロスはヘクトールにこう言う：

「クロノスの御子ゼウスとアポローンが、わたしをたやすく倒し、お前に勝利を授けたのだ。あの方々が御自身、この肩から武具を奪って取られたから。」

これらの記述は全て、アポローンの介入がゼウスの意志によっていることを示しているのである。

結び

本論の内容をここで簡単にまとめておくと、先ず1節と2節では、1巻・24巻と13-15巻を見て、神々の場面には、物語の方向性を明らかにする機能があることが認められた。とりわけ、神々の個人的な介入はretardationを惹き起こし、ゼウスによる介入は、それを終わらせる。1・24巻と、13-15巻の場合、この個人的介入と、ゼウスの介入とが、一種の枠組みを作るという構成をとって、物語を囲んでいる。

3節においては、再び13-15巻と、8巻を取り上げ、神々の描写が、人間界の趨勢や、物語の方向を示していることをより詳しく見た。8巻は、2-7巻のretardationの終わりを告げ、9巻以降の物語の方向づけという役割を果たしている。4節では、神界が人間界と、鏡が像を映すように対応するという特徴を、11巻を観察することによって捉え直した。

5節では、個々の神と人間との呼応関係について、ゼウスとアキレウスとヘクトールの場合を例にとりて見た。つまり、普通ゼウスにアキレウスが反映していると考えられるが、そうした関係にも、物語の進行につれて、移行

が見られる。神と人間の呼応関係も決して恒常的なものではなく、その呼応関係の移行によって、物語の方向が示されているのである。

神々の場面が方向性を明らかにするにしても、それには手法がいくつかある。1つの手法としては、神が予言や意志表明をすることによって、方向を明示する、というものがあり、これは解り易い手法である。しかしまた別の手法として、神の場面が人間の場面と対応する、神の世界が人間の世界と対応する、個々の神が個々の人間と呼応する、などの方法によって、詩人が方向を暗示する、という手法が考えられる（この場合特に、詩人が神を手段として活用しているとも言える）。

さて、既に述べたように、イーリアスはretardationの連続である。またそのほかに、イーリアスにあつては、過去や未来の出来事を投射するエピソード、という技法が多いので、現在進行している物語の方向がはっきりしなくなる。その方向性を明確にする、という機能が、神々の場面の機能の1つとして、あると思われるのである。

注

イーリアスのtextは、D.B.Monro et T.W.Allen, Homeri OPERA, Oxford, I, II, 1920³, を用いる。

1) 一方、ホメーロスの作品そのものの中にも、当時の宗教観をはっきりと看取する考え方については、橋本隆夫、「ホメロスにおける不死性の観念—神々と不死の名声—」，昭和58年度科学研究費補助金（総合研究A）研究成果報告書、『ギリシア，ローマ神話の形成と変質』，昭和59年3月，4ページ～22ページ，参照。

2) 岡道男，『ホメロスにおける伝統の継承と創造』，創文社，1988，436ページ。

3) 松本仁助，「女神と英雄—『オデュッセイア』20歌，33行—53行を中心としたアテネの介入—」，中村善也・松本仁助・岡道男編，『ギリシア・ローマの神と人間』，東海大学出版会，昭和54年，123ページ～126ページ，では，オデュッセイアの神々はゼウスの許可を得て介入している場合が

多いが、イーリアスの神々はゼウスの許可なく介入している場合が多いことが、指摘されている。

4) 1巻8-9行で、アポローンがアガ멤ノンとアキレウスを争わせた、と言われていることも、注目に値する。アポローンは決して、2人を仲違させることを直接の目的として介入しているわけではないのであるが、結果的には、1巻でのこのアポローンの個人的介入が、イーリアスの物語全体のきっかけとなっているのである。

5) S.L.Schein, *The Mortal Hero, An Introduction to Homer's Iliad*, Berkeley / Los Angeles / London, University of California Press, 1984, p.53.

6) ここで「ゼウスの意図」と言うのは、『キュブリア』におけるそれではなく、イーリアスにおいて、ゼウスがアキレウスの名誉を増す為に一時的にギリシャ軍を敗退させるという計画のことである。

7) M.M.Willcock, *The Iliad of Homer, Books XII-XXIV*, St Martin's Press, 1984, p.206.

8) 岡道男, 前掲書, 29ページ-30ページ。

9) 岡道男, 前掲書, 60ページ。

10) C.H.Whitman, *Homer and the Heroic Tradition*, Cambridge / Massachusetts, Harvard University Press, 1958, 225ff. このほか、アポローンとヘクトールの呼応関係等が指摘されている。

11) 類似の表現は、20.417にあるが、これは戦士の死を描いている。

12) W.Burkert, Translated by John Raffan, *Greek Religion, Archaic and Classical*, Oxford, Basil Blackwell Ltd, 1985, p.128.

13) 12. 278-286, 17. 547-550の simile など、そうした例と考えられる。